

ミュージアム 通信

紅花から 小町紅ができるまで 前編

[資料室談議 第4回]

『都風俗化粧伝』より抜粋・解説
江戸時代の白粉

[第3回企画展のご案内]

江戸の装藝
～「よそほひ」の美と技～



国直・(仮題) 婦人煙草遊びの図・其角堂コレクション蔵

紅花から小町紅ができるまで 前編

黄色の花から
紅色が生まれる神秘

「半夏生(はんげしょう)」
と言われる七月二日頃、
山形県の紅花畑では、た
った一輪だけ花がぼつと
咲くという。それを境に次々
と開花し、花畑を紅黄色
に染めていく。

「紅」とは、紅花の花弁
に1%含まれる赤い色素
のこと。伊勢半本店では、
江戸時代より山形県の最
上紅花を原料に、小町紅
を作っている。最上紅花
は他品種に比べ、良質な
赤い色素を多く含んでお
り、紅作りには最適なの
である。玉虫色に輝く紅は、
こだわりの原料、秘伝の
製法、職人の技が結集し
て生まれる。

本誌では、伊勢半本店
の紅作りについて、今号
と次号に分けて掲載。前
編では、山形県の農家に
伝わる、紅花摘みから紅
餅作りまでを紹介する。

江戸時代隆盛を誇った 山形県の紅花産業

紅花は、アザミに似たキク科の植物。原産地は、エジプト、エチオピア辺りといわれ、シルクロードをたどって六世紀頃、朝鮮半島から日本に伝来したという。山形県では、十五世紀半ばから紅花の栽培が始まったとされ、江戸初期には、質・量ともに全国一を誇っていた。主要生産地は、最上川流域。紅花の栽培に土壌・気候が適していただけでなく、物資輸送の大動脈であった最上川の舟運と、紅花



早朝4時頃、花摘みをはじめ。

商人の活躍によって大産地が形成されたのである。**手間暇かけて作られる良質な原料・紅餅**

紅花は、紅餅という加工された状態で紅屋や染織工房などに出荷される。保存がきくのと、赤い色素が乾燥花の十倍も多く抽出できるからだ。次に花摘みから紅餅作りまでを、行程ごとに解説する。

①春に種蒔きされた紅花は、七月上旬から下旬にかけて花を咲かせる。摘み取る時期は、黄色い花の三分の一ほどが赤く色づいた「三片紅(さんりん



花弁のみを摘み取るため手作業で行う。

べに」が最適とされ、その一瞬を逃さぬよう毎朝行われる。紅花は花弁の下に鋭い棘を持つため、朝露でまだ棘がやわらかいうちに、手作業で花弁を摘み取る。②摘んだ花弁をザルなどに入れ、雑

で覆い日陰で発酵させる。朝・昼・晩と水を打ちながら三昼夜発酵させる。すると黄色の花弁が真っ赤になり、ねっとりとしてくる。④十分に発酵した花弁を白に入れ、花びらの形がわからなくなるまでつく。紅餅と言われる。⑤餅のようになった花弁を、三センチくらいの団子状にまるめ、筵に並べ上から筵をかぶせ、足で踏んで煎餅状につぶす。その後、直射日光のもとで、表裏と何回も返しながらか乾燥させる。



均等に酸化させるため、日に数回上下をひっくり返す。

以上の行程により、紅餅は完成する。最盛期は、「最



2~3日、天日で乾燥させる。

上千駄(一駄は百二十キロ)と言われた紅花の収穫量も、現在では、ごくわずかな量が栽培されるのみ。紅餅作りに関しては、白鷹町の一部の生産者しか作ることができない。紅花から抽出される赤は、わずかに黄色を含む日の丸の赤。まさに、日本を代表する色である。紅花の生産は、年々縮小傾向にあるが、紅花生産者、紅屋、染織家などが協力し、紅の文化を守っていかねればならない。

次号後編では、江戸から続く伊勢半本店の紅花について紹介する。

『都風俗化粧伝』より抜粋・解説
 『江戸時代の白粉』

江戸時代の白粉



資料室談議第1回で、「化粧をするにあたって一番大事なのは白粉を溶く段階である」と触れたが、そもそも当時使われていた白粉にはどのようなものがあったのか、今回は白粉の種類について紹介する。

白粉には現代のファンデーションのよくなカラーバリエーションはないが、品質には異なりがあった。『都風俗化粧伝』には次のようにある。

「生白粉を製(つく)りてこれを三段にわかす。極く細末の宜しきを生白粉といふ。其の次を舞台香土といふ。安き白粉也」

点から白粉の善し悪しはその粒度によって見分けられていたことがわかる。つまり、粒度が最も細かい白粉が一番上質なもの、生白粉といい、その次に良いものを舞台香(ぶたいこう)、そして「安き白粉」すなわち品質として一番劣る、粒度の粗い白粉を唐の土(とうのつち)といった。

この唐の土は、別名「土白粉」とも言われたようだが、井原西鶴の『好色一代女』には「土白粉なんべんか塗りくり」している夜鷹(売春婦)が見える。ところで、白粉を溶く水にも善し悪しがあった。一年で最も寒い時期とされる寒中に集めた雪を壺に入れてとっておき、それが解けたもの、要するに雪解け水が白粉を溶くには最適だったようだ。夏までこの雪解け水を保管し、化粧時に用いたという。雪水で溶いた白粉には光沢が生まれ、肌荒れなどのトラブルも起こさなかったようで、更には口紅も雪水で溶くと発色が良かったという。

雪水の次に良いとされていたのは寒水だが、これら二つが手元に無い場合は川水が良いとされた。水温と何らかの関係があったものかと推量されるが、詳細は不明である。

ちなみに、寒中の雪水は、夏場に笹に注いで、四方に振り掛けると、虫除け効果も発揮した模様。



元来、白粉として使われてきた顔料には軽鉛(鉛白)があり、このほか配合剤として白土・穀粉・胡粉(ごふん)・紫茉莉(しまり)などがあつた。江戸時代に一般的に白粉という鉛白粉(鉛白)をさした。さて、ここでいう生白粉(さおしろい)とは混じり気のない鉛白粉のことである。その製法は、『都風俗化粧伝』によれば「鉛を酢で蒸して、水に晒し、固めたもの」だという。先の引用文中には「極く細末の宜しき」とあり、この

「生白粉を製(つく)りてこれを三段にわかす。極く細末の宜しきを生白粉といふ。其の次を舞台香土といふ。安き白粉也」

「生白粉を製(つく)りてこれを三段にわかす。極く細末の宜しきを生白粉といふ。其の次を舞台香土といふ。安き白粉也」

※1：成分(以下同)・塩化第一水銀 ※2：炭酸第二水酸化鉛 ※3：米や粟 ※4：炭酸カルシウム ※5：オシロイバナの胚乳

江戸の装藝〜「よそほひ」の美と技

二〇〇七年十月十三日(土)〜十一月二十五日(日)

企画展観覧料・五〇〇円

この秋、紅ミュージアムでは其角堂コレクションにご協力いただき、「江戸の装藝」展を開催いたします。

本展では、江戸時代の装いの流行を概観すると共に、袋物などの装身具を展示します。

今日の「きもの」の祖型である「小袖」は、元々上流階級には下着として、庶民には労働着として着用されてきたものであり、上着としての機能を果たすものではありませんでした。しかし、江戸時代に入ると、華麗豪華な文様が施されるようになり、広く日常着として普及します。江戸中期には、粋の美意識が装いに投影され、後期になると「江戸小紋」



【其角堂コレクション】日本橋にまつわる浮世絵や文物を始めとして、江戸の袋物や、納札・千社札、武家火消装束等をメインに、江戸風俗資料を蒐集・研究している。

といわれる精緻な文様が流行ります。江戸趣味の風俗が老若男女問わずに浸透していったのです。

そして、この衣服の流行と並行して、江戸の服飾美を語るに外せない存在「袋物」がありました。袋物とは当時の女性が外出の折に持ち歩いたハンドバッグのようなもの。

煙草入れ、紙入れ、鏡入れなどがあり、そのデザインは多彩で奇抜。見る者を魅了して止まない意匠の数々は、今尚褪せることなく息づいています。

江戸職人の粋を極めた至高の工芸品ほか、浴衣の型紙や古裂帖など、選りすぐりの作品をこの機会に是非ご覧下さい。

Information

かわら版

イベント & 講座のご案内

■「第2回和のしつらい講座〜七五三のしつらい〜」

「しつらい」とは、室内の調度品を四季折々の変化に合わせて調える習わしのことです。本講座では、七五三を迎えるお子様をお持ちのご家庭向けに「七五三のしつらい」をお教えます。

要予約・定員20名・講座費2,500円

2007年10月21日(日)午後2時〜4時

■「第2回江戸の化粧再現講座〜秋の外出時の化粧〜」

江戸時代の女性は、紅・白粉・墨で粧いました。本講座では、秋の外出時の化粧を学芸員の解説と共にご覧いただけます。

要予約・定員20名・参加費無料

2007年11月17日(土) 第一回 午前11時〜12時
第二回 午後2時〜3時

※内容・申込詳細は、ホームページに掲載いたします。

新商品発売のご案内

伊勢半本店では10月1日(月)〜11月30日(金)の間、小町紅「手毬」を数量限定発売いたします。七五三用に、新しいデザインの器が仲間入り。女のお子様が初めて点す口紅には、本物の紅をおすすめいたします。

Since 1825

伊勢半本店 紅ミュージアムのご案内

●開館時間/午前11時〜午後7時 ●休館日/毎週月曜日 ●入場無料
(月曜日が祝日または振替休日の場合は、翌日が休館日となります)

東京都港区南青山6-6-20 K's南青山ビル1F TEL&FAX:03-5467-3735
東京メトロ銀座線・千代田線・半蔵門線「表参道」下車B1出口より徒歩12分

<http://www.isehan.co.jp>